2016年8月20日 1064号
次回発行は8月27日付です。
リビング かごしま
毎週土曜日付発行 無料
発行／南日本リビング新聞社
記事・広告……TEL.099・222・7288
配布に関して……TEL.099・239・8124
リビングプロシード …TEL.099・216・2390

LIVING リビング かごしま
南日本リビング新聞社
〒892-8515 鹿児島市泉町14－1 リビングビル
ホームページ http://www.m-l.co.jp e-mail: info@m-l.co.jp
JAFNA http://www.Jafna.or.jp
日本生活情報紙協会加盟紙 日本ABC協会加盟紙（新聞雑誌部数公査機構認証）
リビング新聞は仙台から鹿児島まで65エリア 約900万部をネットワークしています

リビング Interview インタビュー

秘めた可能性に注目！竹林は資源の宝庫

中越パルプ工業 川内工場長
要堺 由隆 さん

PROFILE：ようかい・よしたか 1958年富山県生まれ。法政大学工学部卒業。1980年中越パルプ工業入社。高岡工場技術研究部長、本社生産本部副本部長などを歴任し、2015年から現職。薩摩川内市竹バイオマス産業都市協議会の初代会長を務める

家具や工芸品、炭などの原料となり、春にはタケノコも提供してくれる「竹」。その竹林の面積が全国一位の鹿児島県ですが、近年は適切に管理されず放置される竹林も増えています。「生命力旺盛でどんどん茂るのに、タケノコは生えないなど、林が荒れる〝竹害〟が広がっています」と、製紙会社・中越パルプ工業、川内工場長の要堺由隆さん。

「地域の方からも〝山が荒れないよう、竹をなんとかしてほしい〟と相談を受けるようになり、社として何ができるか真剣に考えました」。工場では約10年前から竹紙製造に取り組み、硬さなど、加工する上での課題をクリアしてきました。

竹紙の本格生産を見据え、原料を安定確保する仕組みも構築。現在、地元の林業従事者やタケノコ農家約2千人から、年間約2万tの竹を集めています。「継続的に手を入れることで、竹林や里山は確実に保全されていきます」

地域の課題を、資源に変換

川内工場のある薩摩川内市も、竹害を地域の課題として重要視。地域活性化にもつなげたいと、昨年「薩摩川内市竹バイオマス産業都市協議会」を設立、要堺さんは会長に就任しました。現在、川内工場の竹集荷の仕組みもベースに、産学官71団体が知恵を結集。竹に関する多様な研究開発を進めています。

竹の用途は幅広く、竹紙や竹炭、竹材から、バイオマスプラスチック、さらに〝重さは鉄の5分の1、強さは鉄の5倍〟ともいわれる繊維「セルロースナノファイバー（CNF）」など、石油製品の代替品になりうる夢の新素材まで応用が可能です。身近なところでは、竹炭入りパン粉を使った真っ黒なメンチカツ「薩摩川内黒メンチ」も。イベント販売で大好評を博し、「竹の可能性を広く知ってもらえたのでは」と要堺さんも喜びます。

川内工場では、竹からCNFを製造する専用設備が来年完成予定。「会社が持つ技術やネットワークを地域に還元できるのがうれしい。協議会でも異なる産業が協力し、さらに多彩な竹の可能性を共に探りたい」

バイオマスといえば燃料活用が多い中、「竹を資源として徹底活用後、残ったら燃料に」と先進的な理念を掲げる協議会。その活動と、大きな可能性を秘める竹という素材に、大注目です。（編集部 松元久恵）